

〈論文〉

記憶のパリンプセストとその先へ

— ドラブルの *The Ice Age* (1977) の考察 —

風 間 末起子

Abstract

Margaret Drabble's eighth novel, *The Ice Age* (1977) is a challenging work in which she attempts to take some new lines in writing. *IA* is remarkably different from her previous seven novels in the sense that it makes a difficult departure from her writing of novels of manners based on describing everyday life with a touch of humour.

First of all, the major character is not female but male. Although Drabble has been labeled as "a women's writer," and she had been focused on female characters since her first novel, *A Summer Bird-Cage* (1963), *IA* is a story about a male figure, Anthony Keating.

Second, the social background of this novel is the economic recession of the 1970s UK. Anthony is a typical middle-class son of an Anglican archbishop in northern England, a graduate of a public school, and an Oxford dropout. He thrusts himself into the trade of property development so that he can avoid a gentleman's profession expected by social class conventions. As a result, he finds himself involved in the economic stagnation of the first half of the 1970s and also experiences a great depression meandering through a dangerous realm of physical and mental bankruptcies.

Third, Anthony's mental record is traced through some architectural landmarks such as a cathedral, a gasometer, and a sweet factory; he can merge the present with the past and circulate through both by perusing the present situations overlapped on past memory and history just as if reading a palimpsest. At the same time, a major character's viewpoint is linked with that of the other characters in order to comprehend what he/she feels; this shift functions as a means to embody multiple viewpoints.

Fourth, in this novel Anthony Keating finally relies on religious belief, a belief in God, through reading Boethius's *The Consolation of Philosophy* (AD 525) when he is at a halt and fails in connecting past, present and future. Although many of Drabble's main characters attempt to unite human free will with an irrational fate, Anthony declares the convergence between a free will and Providence, instead of the reconciliation between a free will and absurdity which is pursued in many of her novels.

On the whole, *IA* can be seen as a sort of trial work followed by a next masterpiece, *The Middle Ground* (1980), which further develops ingenuity, artistry, and skill. In this article, I'd like to examine *IA* to exemplify how Drabble tries to explore a new direction in her writing.

キーワード： 内的表象としてのランドマーク、新旧の直線的構図、自由意志と神の摂理の共存

序

マーガレット・ドラブル (Margaret Drabble, 1939-) は、第8作目の小説 *The Ice Age* (1977、以下 *IA* と略す) において、それ以前の作品とは異なった方向を目指そうとした。

相違点は主に4つある。一つ目は主人公を男性人物にしたことである。ドラブルは、描くのに不得手な「男性」の視点と価値観に焦点を当てて、そこから物事を見ようと試みる (Barbara Milton 57 ; Rose 113)。

二つ目は、一番大きな相違点であるが、時代的、社会的背景にかなりの重きが置かれている点である。時代は1970年代前半の不況時代、経済的な意味での「氷河時代」である。1960年代から70年代はイギリス病と称され、社会保障制度や基幹産業の国有化が裏目に出て、経済が著しく停滞した。1960年代後半の一時的な開発ブームに煽られてビルや道路建設などの土地ブームが起こるが、70年代前半のオイルショックを契機に物価の上昇と失業率の増加、ポンドの下落と労使紛争の頻発などで社会不安が増大した。こうした世相を

背景に、作品では不動産開発業に着手した主人公 Anthony Keating の精神的荒廃が描かれている¹。その結果、本作品にはダブル小説で馴染み深い、日常性を基盤にした風俗小説のテイストが欠如している。ユーモアのセンスに欠け、作品は終始、荒涼とした雰囲気支配されている (Moran, 34-36 & 56)。

三つ目は構成面である。作品は3部構成だが、章分けされずに全部で57のセクションから成り、各セクションには多数の脇役が割り当てられて、語りは三人称で進行していく。この特徴は、先行する2つの小説 (*The Needle's Eye*, 1972 & *The Realms of Gold*, 1975) ですでに実践されているが、IA では各セクションが連鎖的に作用して、人物から他の人物への視点の交差と連結が巧みに図られている。さらに、Anthony の精神史は大聖堂、ガスタンク、菓子工場などの建築的ランドマークを通して追跡されている。ここでは、重ね書きされたパリンプセスト (羊皮紙) を読み解くように、彼の現在が過去と混じり合い、接続する。

最後の四つ目は Anthony の信仰への帰依である。彼は、小説の後半部で、過去と現在の統合に失敗し、未来を模索できなくなるが、その時、自由意志と運命の和解を図る代わりに、自由意志と神の摂理の共存の中に、不明瞭な未来への解答を見出す。小説の最終部で Anthony はバルカン半島にある架空の共産国家ワラキアでスパイ容疑のために収監されるが、そこでボエティウスの『哲学の慰め』(AD525頃)を読む。神への帰依は唐突で不可解な成り行きだが、これはダブルの宗教的哲学の導入であり、Anthony を回復させる手段となっている。この結末には賛否さまざまな評価があり、否定的な意見も多い。

小説の出版当時、ダブルは38才であったが、小説主人公の Anthony も同年齢に設定されている。両者の年齢の一致は今回も意図的なものであろう。年齢だけでなく、ダブル自身の作家としての試行錯誤を、同年齢の男性人物 Anthony に重ねたことは間違いない。24才で作家デビューを遂げたドラ

ブルが、38才にして立ち止まり、分岐、前進、跳躍しようとしている²。

本稿では、内的表象としてのランドマーク、新旧の直線的並置、自由意志と神の摂理の共存などをキーワードに、未来を志向しようとするドラブルの試みを検証してみたい。

1. 内的表象としてのランドマーク

主人公 Anthony Keating は、他のドラブル小説の多くの主要人物と同様に、典型的な中産階級に属し、彼も帰属階級とその価値観から逃避しようとしている。

Anthony の父は、イギリス北部の大聖堂の主任司祭で付属学校の校長職にあった。Anthony はその三男で、三兄弟はいずれもパブリック・スクールとオックスフォードで教育を受けている。二人の兄は弁護士になったが、Anthony は大学時代から政治的左派を自認し、中産階級が好む手堅い職業をあざ笑った。大学中退後はミュージカルの作曲を手がけ、放送局のプロデューサーの職に就くが、やがて不動産開発の共同経営者に転身する。

大聖堂の息子という出自から Anthony が離脱しようとする際に、ドラブルは彼の帰属階級を連想させる道具として、キリスト教の教会用語と19世紀小説からのアリュージョン（引喩）を多用する³。イギリス国教会、オックスブリッジの文学部、紳士の専門職、合理主義、礼節、優越感（*IA*, Part 1, 36）など、中産階級に付随する特質はドラブル小説では馴染みのものだが、Anthony の場合、その使用には、中産階級を揶揄するだけでなく、過去と現在を合流させる意図がある。古い教会用語と19世紀の小説の上に Anthony の現在を上書きすることで、新旧の両者は連結することになる。

具体例を挙げてみよう。Anthony は不動産ディヴェロッパーへの大転身について、“conversion”「改宗」（Part 1, 27）と豪語し、オックスフォード出身者が商売人になったことについて、オースティン（Jane Austen, 1775-1817）の小説を意識しながら、“I want to stop being a gentleman

and become a business man” (Part 1, 29) と誇らしげに宣言する⁴。これに続く次の引喩はハーディ (Thomas Hardy, 1840-1928) の小説からである。Anthony は *Tess* (1891) に登場する牧師の三男坊 Angel Clare に自分を重ねて自問する。ビル建設は、世俗的な “the glory of commerce” 「商売の栄光」 (Part 2, 203) が目的であるが、ならば大聖堂の建築は “the glory of God” 「神の栄光」 (Part 2, 204) が目的なのかと自問する⁵。ここでは、“it [a University education] may be used for the honour and glory of man” (*Tess*, Chap18, 144) と父に向かって抗弁する Angel の言葉を意識することでアイロニックな効果をねらうと同時に、現在 (ビル建設) と過去 (大聖堂建設) が Anthony の意識下で途切れずに持続する状態を描くために、19世紀小説が利用されている。

現在と過去が間断なく連続するという認識は Anthony の自己内省を深めていく。自らが作り上げたと信じた「現在」も、実は決別した「過去」がデフォルメされたものだ気づかされるのである。大聖堂とは決別したが、彼が不動産開発業者になったのは、所詮、“[He] Had built his own cathedrals, bought his own close” (*IA*, Part 2, 199) という模倣行為であり、循環の経路をなぞっているにすぎない。過去は確実に彼に舞い戻っているのである。

この循環の経路についてもう少し説明を加えてみよう。決別した父の大聖堂の代替として、Anthony はガスタंकを購入して、“the new Anthony” (Part 1, 35 & 36) に変身したとを感じる。ところが、“the new line” (Part 1, 36) が真に新しいことはあり得ず、古い過去が付きまとう。ランドマークとしての高層ビルや大建築群は、居場所を認識させる目印であると同時に、人物の自己覚醒としても機能する⁶。

Anthony のランドマークは巨大なガスタंकである。購入した土地に建つガスタंकを見るたびに彼は興奮した。その喜びは大聖堂を眺めた子供の頃の驚嘆を越えていた。だが、ガスタंकは、所詮、父の大聖堂を乗り越え

るための代替物であると彼は気づいている。男性の成功シンボル（そびえ立つガスタンク）を媒介にして、喪失した過去を補完する心理作用を行ったにすぎない。

it [gasometer] was painted a steely grey-blue, and it rose up against the sky like a part of the sky itself; iron air, a cloud, a mirage, a paradox, defining a space of sky, changing subtly in colour as the colour of the sky changed. (Part 1, 33)

上記の天に向かってそそり建つガスタンクは、同じように太陽に照らされて堂々とそびえ立つ大聖堂の光景と連結する。

The cathedral, which dominated the small city, could be seen from many miles away, for it was built on a hill, rising steeply out of a flat plain. It was mid-afternoon as he approached, and the sky was full of a peculiar radiance: the sun was shining from behind banked clouds, glancing downwards in those strange religious rays beloved of landscape painters, and lighting the cathedral's roof and spire with a golden light. (Part 2, 199)

父の訃報を契機に、久々に見て回った故郷の大聖堂は Anthony の内的表象となる。大聖堂をじっくりと観察することで、彼はそこに自身の精神的記録を発見し、家族の愛憎劇を解読していく。側廊には石の玉飾りの彫刻が並んでいる。この玉飾りは、誕生日ケーキに付いていた先のとがった小さな糖衣を連想させる。それは戦時下の物不足の時代に母が三男坊の自分のために作ってくれたケーキである。そのケーキは家族の思い出と合流する。戦後は従軍牧師の父の帰還に始まって、二人の兄と父の三人が“evil Trinity” (Part

2, 205) となって自分をはじき出し、母の愛情を独占できなくなった記憶が思い出される。

ここでは、三男坊の恨みに起因する陳腐な家族物語が回想的に提示されるわけだが、大聖堂の玉飾りの彫刻から誕生日ケーキの糖衣を連想することで、彼の帰属階級と家族への憎悪が思い出され、そこから逃避した心理的要因が確認される。大聖堂と家族への愛憎を経由して、反発の手段としての不動産事業と早婚・子沢山の家族、こうした過去と現在の遭遇は次には他者との合流につながっていく。

Anthony の憎悪は、一緒に暮らす女性 Alison Murray の長女 Jane Murray が抱く憎悪と重なっていく。18才の Jane は、脳性マヒの妹 Molly が原因で、母親から十分な愛情を注いでもらえなかったという恨みを抱いている。その仕返しのように、バルカン半島の共産主義国家ワラキア（旧ユーゴスラビアや旧チェコスロバキアのイメージを土台にした架空の国、Barbara Milton, 48）で2人の人間を事故死させる人身事故を起こし、Jane はワラキアの刑務所に収監されることになる。Jane の反抗的態度を見るにつけ、Anthony は彼女に好感を持てなかったが、今初めて Jane に共感できるのである。彼自身も愛情の「埋め合わせ」（IA, Part 2, 206）を母親からしてもらえなかったから、Jane は彼の分身となる。だから自分が Jane のために代償行為をしてやろうと思う。その言葉通りに、小説終盤では、Anthony は内乱時のワラキアから Jane を救出する。自己内省を通して、他者の視点に立ち、他者への理解を深めるという行為は、次作 *The Middle Ground* (1980、以下 *MG* と略す) のヒロイン Kate Armstrong が実践した方法でもある。Kate は、言語的なコミュニケーションによる相互理解を信じていないので、それを補完するために、他者の視点に立つことで他者への理解を試みる (*MG*, 87&92-93)。

他者の視点に立つという Kate の行為は、物事を複眼的に見る立場の表明であるし、自分の思考に他者の視点を取り込む行為は、ギリガンが女性の道

徳的判断の特徴として挙げた「強固な文脈依存的な相対主義」(Gilligan, 22 & 58-59)に通じる“care”(思いやり)の行動につながる⁷。IAでは、微弱ではあるが、次作品で強く提示される視点の移動の工夫と仕掛けが散見できる。

さて、ランドマークを媒体に過去と現在を重ね合わせる行為について、もう少し例証してみよう。菓子工場を通してAnthonyは過去を連想し、現在につなげていく⁸。その工場は、彼が初めてロンドンに購入した敷地の上に建っていた。菓子工場は土地開発のために壊される予定であったが、それでも、彼は自分の会社の名前を、“the Imperial Delight Property Company”(IA, Part 1, 32)と名づける。菓子工場の名称を会社に残すことで、現在を過去につなぐのである。

さらに、Anthonyは土地が持つ過去の歴史に思いを馳せる。倉庫の壁に釘で打ちつけられた蹄鉄は、菓子を馬車で配達した時代を想起させる。100年前の過去は今も脳裏に浮かぶ。土地のニワトコの木にも往時の職人を結びつけて、彼は想像を膨らませる。

There was a large, open, cobbled space in the centre of the site, which had a strange look of the countryside about it. Weeds grew up between the stones. There were horseshoes, nailed on the warehouse wall. Once there must have been a stable: no doubt the sweet-makers had distributed their sweets a hundred years ago by horsedrawn van. There was even a small tree: an elderberry had managed to root itself between the cobbles. It would be a pity in a way, to remove this space, though nobody had seen it for decades, except for the handful of people who worked there, but it too would have to go. (Part 1, 31)

菓子工場は今では「博物館行き」の代物であったが、その在りし日を想像することで、連続する歴史がその土地に付与されるのである。Sizemore は、都市はパリンプセストのように、層を重ねたテキストであるという解釈を紹介している。都市は絶えず変化するが、都市の過去が失われるわけではない。羊皮紙のように層が上塗りされ保存される。都市ではその層を読み取る人だけが生き残れると分析されている (Sizemore, 28, 45&47)。

工場も倉庫も開発のために潰されるが、Anthony はこの土地の過去の層を解読できる人、つまり生き残れる人である。このように、本小説の初期や中期の段階 (Part 1&2) では、Anthony は現在のランドマーク (ガスタンク) に過去のランドマーク (大聖堂) を連想して、両者を結びつけ、自身の精神史を解読できたし、上述の菓子工場を通してパリンプセストを認識する行為、つまり、現在の層の下に過去の層を垣間見る (透視する) 行為もしていく。

以上のように、本章では、ランドマークを媒介にして、過去と現在が呼び起こされ、羊皮紙の上にその記録が上書きされるように、二つのものが会おうさまを詳述してきた。この合流は他者への視点の合流にもつながり、他者への理解を促進させるという意味で、双方向的な作用を繰り返しながら、精神の柔軟性と拡張を期待させるものとなった (Myer, 123)。だが、その後の新旧の二項対立は直線的に並置されるのみで、双方向性は否定されていく。Anthony と Alison は小説の後半部では過去と現在を前にして途方にくれる。当然、その先にある未来を把握することはできない。次章では、過去と現在がどのように処理されているのかに注目してみたい。

2. 混じり合わない過去と現在

Anthony のパートナー Alison Murray は、“I can't split myself in two” (IA, 154, 185, 195, 206) という表現を繰り返す。この「身体の分断」の表現は、若さと老い、都市開発と老大国、戦後の新時代と過去の帝国主義

など、二項対立を提示するためのメタファーでもあるし、この二つの間で Alison は分裂したままで、両者を統合できない。

「監禁」と「刑務所」はこの作品のキーワードである (Myer, 112-113 ; Suga, 90) が、実際に Anthony は大きな屋敷に幽閉も同然に暮らしているし、友人の不動産業者 Len Wincobank と、Alison の娘 Jane は刑務所に収監されている。Alison の場合はノーサム駅近くの地下道に閉じ込められる。彼女は、ワラキアから帰国後、重いスーツケースを引きずりながら、駅近くの薬局に寄ろうとするが、地上からは近づけないので地下道を歩くことにする。一酸化炭素の悪臭にまみれ散乱するゴミに足を引っかけながら、ようやくたどり着いた地点はコンクリートの安全地帯である。目の前には四車線の車道とガードレールが行く手を遮っている。その時、彼女は一匹の犬に遭遇する。そのシェパード犬は交通事故で腹部の半分を削ぎ落とされた状態で歩いていた。

It was a dog, an Alsatian dog, plodding down the middle of the four-lane road. Its nose was down, it ignored the cars, it walked resolutely on, nose low, tail low, with a plodding, determined, dedicated gait. And she [Alison] could see that the whole of one side of the dog had been ripped away. She could see its flesh. Its fur had been scooped and flayed backwards: a wad of it hung rumpled... It had collided with a car, evidently: the cars now parted for it, too late. Where would it go? There was nothing but concrete, as far as the eye could see. There was no cave, no hole, no retreat, no lair. But it walked as though it had some purpose. It was going somewhere, if only to death.... No forest awaited it, no pond, no stream. Its fur had been scooped back like an old jumble-sale coat. Ruched and rumpled, from the living side. (IA, Part 2, 177) [下線は筆者]

片腹から内臓をぶら下げた犬の姿は、娘の Jane と決別して帰国の途についた Alison の心模様である。Alison の月経の血 (Part 2, 114&158&159) は犬の出血の予表であったし、犬の腹から流れ出る血は、娘を叱った時の血を吐くような Alison の言葉 (Part 2, 154-158) を連想させ、さらには、姉 Rosemary の乳がんで切除された片方の乳房へとつながっていく (Part 1, 100)。姉の乳房が切り取られたのは、自分が姉を恨み、姉から決別したからだとして Alison は自責する。“I can't split myself in two” と自戒していた彼女が娘 Jane を捨てた結果が半死の犬の姿となって舞い戻ってくる。当てもなく、半分の体で歩き続ける犬は、精神的に分裂した Alison の分身である。

Anthony も Alison の混迷を共有する。外務省の官吏 Humphrey Clegg との出会いをきっかけに、特に Clegg の高級フラットの “an old-fashioned, solid, reliable style” (Part 3, 260) をきっかけに、Anthony は過去と現在を対比させていく。確実性とフェイク、万能の Clegg と服装倒錯者の Clegg、贖罪師の Anthony と懺悔の人 Clegg など、対照と対比は続き、過去（戦前）と現在（戦後）の二項対立の図式が続いていく。

ロンドンの高級住宅街ケンジントンの Clegg の住まいには19世紀の大英帝国が跳梁していた。豪華なマホガニーの家具と海外駐在時代のアジアの調度には栄華の時代の残滓があった。若き日の Anthony は自分のことを進歩的と自負していたから、この帝国主義を茶化するために、安物の家具を購入し、性の自由を謳歌し、平等を信奉して子供を公立学校に送り込み、曖昧なアクセントを身につけさせ、階級制度を和らげようと異なる地区の住民とも仲間になった。彼らは19世紀の価値観を駆逐し、新しいスタイルを目指したのである。だが、新しいスタイルなど、所詮、遺棄した過去を補完するための悪あがきにすぎなかったと言う。

they [Anthony and his clever friends] had worn themselves out and contorted themselves trying to understand a new

system, a new egalitarian culture, the new illiterate visual television age.... they had tried to learn new tricks. But where were the new tricks? They had produced no new images, no new style, merely a cheap strained exhausted imitation of the old one. Nothing had changed. Where was the new bright classless enterprising future of Great Britain? (Part 3, 261)

上記の引用は、1960年代から70年代の擬社会主義を装った自分自身への告発であると同時に、彼の精神的混迷の吐露である。不動産開発に乗り出した頃、Anthony は、自分のことを“the new Anthony” (Part 1, 35) と高らかに謳い、古典学者の友人 Linton Hancox の懐古趣味を中傷した。Linton は、「新しい学習方法」に転向できずに、「伝統的な古典の学識」(Part 2, 226) に固執し、時代錯誤の敗北者となったから、Anthony にとっては侮蔑の対象であった。一方で、Linton とは真逆な方向を歩んだ Anthony が実践したことは、到達不能な平等主義と性の自由を標榜するフェミニズムであった。今の彼はこの代用品に自嘲的である。なぜなら、新しい価値観は旧体制をなじるための軽薄な独善であったと考えるからだ。

現在は過去の模倣でありデフォルメであるという Anthony のここでの認識は、本稿の第1章で取り上げたガスタンクと大聖堂の例のように、過去と現在の連結を予想させるものとなるが、大きな相違点は、帝国主義と擬社会主義という過去と現在のどちらにも Anthony が共感していない点である。したがって、過去と現在は混じり合わない。彼は新旧の間隙で宙ぶらりんとなり、二つの間には双方向的な連結はなく、直線的な並置があるのみだ⁹。

本稿の第1章では、回想によって過去と現在が想起され、二つは出会い、二つの記録は重ね書きされた。この合流は他者への視点の合流にもつながり、他者への理解を促進させるという意味で、双方向的な交わりがあった。だが、本章で取り上げた、過去と現在の二項対立は混じり合わず、直線的に並置されるのみだ。次章では、Anthony の解決方法を眺めてみたい。

3. 自由意志と神の摂理の共存

これまで考察してきたように、Anthony と Alison は過去と現在を熟考し、思索を行ってきた。次は未来への問いかけである。この一連の流れ、過去・現在・未来という時間枠の記述は、ボエティウス (Anicius Manlius Severinus Boethius, AD 480-524) が言う「神の永遠性」にたどり着くための伏線となる。ボエティウスはその著書『哲学の慰め』(*The Consolation of Philosophy*, 525頃) で、人間存在の時間性格と、限りない生命を一度に全体として、また完全に所有する神の永遠性とを対比させることで、人間の自由意志と神の摂理の共存を提示した (Boethius, 115)。ドラブルはこの考え方を Anthony の思索に応用する。本章では、ボエティウスに影響された Anthony の思考に注目してみたい。

Anthony は破産寸前まで追い込まれたが、結局は共同経営の会社債務を返済し、ロンドンの持ち家も高値で売却し、ヨークシャーの屋敷と3,000ポンドを手元に残して倒産や借金からかろうじて開放されることとなる。ところが、彼はここで行き詰まり、酒浸りになる。彼は未来を思い描けず、苦悶するのである。未来は“Shapes drifted, insubstantial, unconvincing” (IA, Part 2, 224) の状態で浮遊するだけだと感じる。子供という次世代に望みをかけても、義理の娘 Jane の不遜な態度を見れば、楽観的な思いに耽った自分に腹が立つ (Part 3, 247&276)。

Alison も自分の未来像など描けないと思う。若い頃は確信を持てたのに、今や信念は形をなさず、“fragmented and dissolved into uncertainty”

(Part 2, 234) の^{てい}体で浮遊状態になっている。こうした「無定型」や「不確実性」を恐れずに、それを楽しんだのは、次作 *MG* のヒロイン Kate Armstrong であった (拙著、210-215)。Kate は、不確定な未来に怯えないで、その偶然性や不確実性を受け入れる覚悟をしたが、この不確実性は運命として受諾されている¹⁰。Anthony と Alison は息をひそめ、「無と一体化」

(*IA*, Part 3, 250) して歩みを止める。*The Waterfall* (1969) の三人称のヒロイン Jane Gray のように (*The Waterfall*, 7)、彼らは自ら進んで運命に身をゆだねるのである。

I [Anthony] will let myself be pushed. I am nothing but weed on the tide of history. He [Anthony] found the notion of being weed on the tide history oddly reassuring, rather than depressing; amusing, even. (*IA*, Part 3, 262) [下線は筆者]

上記は、外務省の役人 Humphrey Clegg の指示に従って、バルカン諸国の架空の国ワラキアへの出発に同意した時の Anthony の心理であり、それが比喩的に描写された箇所である。“weed” (藻屑) は「運命」のメタファーである。作品では、“choice” (Part 1, 101 & 102 ; Part 2, 111, 117, 199, 228&234)、“self-will” (Part 1, 102 ; Part 3, 249)、“fate” (Part 1, 78 ; Part 2, 132, 159, 226 & 227 ; Part 3, 281 & 296)、“chance” (Part 2, 169 & 227)、“luck” (Part 1, 101)、“accident” (Part 1, 101 ; Part 2, 158 & 159) という単語が頻発するが、いずれもドラブル小説では馴染みの用語である。*IA* では、Alison も Anthony も自由意志が限定された時に運命に寄り添い、両者の共存を提示している¹¹。

Anthony は友人で古典学者の Linton の翻訳書『アンティゴネ』(Sophocles, 497/6BC-406/5BC, *Antigone*, 44BC) に記された Linton の序文を取り上げて、不条理な運命への受諾の準備とする。謀反人の兄の死体を葬ったことで処刑されるアンティゴネの姿に、Anthony は、反抗的な義理の娘 Jane を助けたことで、ワラキア国で不条理にも実刑となる自分を重ねるのである。Linton は序文の中で、現代社会は行動を規制する厳格な“code”を欠いているために、また18世紀の“rationalism”に染まりすぎているために、だからこそいっそう、“irrational”と思えるものに心惹かれると説明していた

(Part 3, 285)。自由意志や理性主義を尊重しすぎているからこそ、我々は却って不条理な運命に感動を覚えるという理屈である。これは、彼が運命への積極的な受諾を示している例である。

しかしながら、*IA* で特異なことは、運命の受諾が「神への帰依」に変化している点である。従来のダブル小説では、人間の自由意志と運命の対立的な構図は、例えば *The Waterfall* の三人称の Jane (運命に従属) と一人称の Jane (自由意志で行動) の語りを通して、分裂した両者がやがて統合する地点を見出す例で明らかのように、二律背反や分裂は時を経て調和へと向かった。ところが、*IA* では、運命は「神」という概念に変質し、自由意志と神の摂理との共存が図られる。運命によって被るように見える不条理も、神の摂理と自由意志の共存の中で説明されることになる。しかも、過去、現在、未来を思考する一連の自由意志の活動は、ローマ人ボエティウスの言う神の本性「永遠なる善」へとたどり着くための思索過程となる¹²。

Anthony の神への帰依は、ダマスコ途上のパウロの回心 (使徒言行録, 9: 1-6) に喩えられたように (*IA*, Part 3, 267)、唐突で不可解な展開に見えるだろう。スパイ容疑で収監後、ワラキアの労働者コロニーで、彼はボエティウスの『哲学の慰め』に影響を受けて本を執筆する。本のテーマは神の本性と宗教的信仰の可能性についてである。彼の回心についてはさまざまな解釈が可能である。

まず、運命についての Bokat の解釈を紹介しよう。Bokat は、ダブル小説では、重大局面で運命が使われていると分析する。内的探求を続けるよりも、運命を持ち出すほうが、人物の魂を回復させるには手っ取り早い方法なので、解決方法として運命に頼ったという解釈である。運命は人物たちの心理的混迷を容易に解決させるためのシステム、という Bokat の分析は興味深い (Bokat, 201&230)¹³。

Bokat と類似した解釈の例として、本作品の Alison の反応を見てみよう。労働者コロニーに収監された Anthony の彼女宛の手紙の文面、“God

would advise her” を読んで、“Who was God? Was it a code name for Giles Peters or Len Wincobank?” (IA, Part 3, 290) と訝る Alison の感じ方は読者のものでもある。ここでは、Anthony の神は一種の思考停止として疑問視されている。

このような疑心暗鬼を読者も抱く。特に結末のプロット展開の不自然さは「予定された結末」にたどり着くために仕組まれたように見えるし、その強引さは多くの批評家に不評である。ありそうもない筋の設定、特に外務省の役人 Clegg との会合、英国のスパイ（書類の受け渡しをするため）としてワラキアに送り込まれる急展開、ワラキアの飛行場での内乱騒ぎと出国時の緊迫した場面など、これらは予定された結末に導くための強引な筋書きとの印象がぬぐえない¹⁴。

「予定された結末」とは、『哲学の慰め』に影響された Anthony の結論、つまり人間の自由意志と神の摂理の調和である。ポエティウスは『哲学の慰め』の第5巻3で、神の存在と人間の自由意志の関係を調和させようと試みている。ポエティウスと同じように囚われの身となった Anthony は神の摂理と自由意志の相関関係を熟考し、両者の共存と統合に思いを致すのである。その行程を眺めてみよう。

He [Anthony] cannot evade the idea that God has given him the chance to work out the first causes and the last causes, and that he must not reject it. (Part 3, 295)

上記の Anthony は、人間の自由意志の活動が永遠なる神、善なる神のもとで凝視されている事実を確認する過程に置かれている。次は、上記の Anthony の思考の根拠となる『哲学の慰め』からの引用箇所である。

you can indeed alter what you propose to do, but, because the

present truth of Providence sees that you can, and whether or not you will, you cannot frustrate the divine knowledge any more than you can escape the eye of someone who is present and watching you, even though you may, by your free will, vary your actions. (Boethius, 118-119)

さらに、Anthony は、なぜ人間がそれに値しないのに不条理な苦しみを被るのかという疑問に対しての答えを見つけようとしている。本小説では、罪のない者がでたらめな運命によって罰せられる人物で溢れている。Alison の次女 Molly は脳に障害を持っていたし、Max Friedman はレストランで結婚記念日の祝いの最中に IRA の爆弾で爆死し、妻の Kitty は命は助かったが片脚を失った。収賄罪で収監された建築家の Callendar は気がふれた状態で、“Something has gone wrong with the laws of chance” 「不運が起きる確率に狂いが生じている」(IA, Part 2, 169) と言って、自分の犯罪を不運のせいにして、その言い訳とした。

ボエティウスによれば、摂理とは善へと向かう神の精神の持つ先見性であり、これが時間に割り当てられたものが運命と呼ばれる。この2つは異なっていて、運命は摂理に従属する。なぜならば、運命の秩序は摂理の単純性によって作り出されるが、変動上のつながりと時間上の秩序であるので、摂理は運命の変動する秩序を超越する (Boethius 91-92)。ボエティウスが試みたように、Anthony も、ギリシア的な不可避的運命という考え方を、キリスト教の一神論的哲学に適応させて、不運と思えるものが善へと向かう神の摂理によって支配されていることを示そうとする。

If God did not appoint this trial for me, then how could it be that I should be asked to endure it, he [Anthony] asks. He cannot bring himself to believe in the random malice of the

fates, those three grey sisters. He is determined, alone, to justify the ways of God to man. (IA, Part 3, 296) [下線は筆者]

小説の冒頭近くでは、

There was no one common cause for all these terrible things.
Or if there was, Anthony had not yet grasped it. (Part 1, 13)

と記されて、説明のつかない不条理な運命について言及されているが、結末で Anthony はその理由を見つけたことになる。

下記の引用は、ポエティウスの考え方が端的に述べられた箇所である。ポエティウスは、人間が神の摂理に支配されていても、人間の理性的な活動が可能であることを証明しようとした。人間は、神の認識の仕方を人間の理性の認識の仕方と同じ次元で考えてしまいがちである。ところが、神は時間に制限されない存在、つまり過去、現在、未来として物事を見るのではなく、無限の時間を現在として包括的に同時に所有しながら万物を見る。したがって、我々が未来として見る将来の出来事を予知するのではなく、永遠の現在として眺めるので、それらの出来事は不確定なものではなく必然的なものとなり、摂理と呼ばれる。だが、その出来事の中には自由意志から生まれるものもある。そして、人間は、完全な知識と善性を持つ裁き手である神の凝視の前で行動するので、神に見習う意味で、自由意志を使って徳高く行動する義務があり、善を判断し決断するために自由意志を行使しなければならない。

God sees as present those future things which result from free will. Therefore, from the standpoint of divine knowledge these things are necessary because of the condition of their being known by God; but, considered only in themselves, they lose

nothing of the absolute freedom of their own natures.... God has this present comprehension and immediate vision of all things not from the outcome of future events, but from the simplicity of his own nature.... “Since this is true, the freedom of the human will remains inviolate, and laws are just since they provide rewards and punishments to human wills which are not controlled by necessity. God looks down from above, knowing all things, and the eternal present of his vision concurs with the future character of our actions, distributing rewards to the good and punishments to the evil.... Therefore, stand firm against vice and cultivate virtue. Lift up your soul to worthy hopes, and offer humble prayers to heaven. If you will face it, the necessity of virtuous action imposed upon you is very great, since all your actions are done in the sight of a Judge who sees all things.” (Boethius, 118-119) [下線は筆者]

このように、Anthony はボエティウスの思想を借り受け、不条理な運命の悪戯という迷いに振り回されることなく、善なる神の摂理を信じ、その信仰の中で平安と救いを得ようと決意する。

何度も述べたように、読者は、唐突で不自然な筆の運びのせいで、ダブル小説では馴染みはずの「運命と自由意志の調和」から進化した「神の摂理と自由意志の共存」のテーマにすんなりと寄り添うことができない。だが、ダブルがこの時点で神の存在に賭けていることも事実である (Creighton, *Interview*, 30)。下記のインタビューで、IA との関連で宗教観について問われた時、ダブルは、物事の核心のようなもの、あるいは何かパターンのようなものがいつか開示されるという信念を持っていると述べた。

I have this deep faith that it [the pattern] will all be revealed to me one day. One day I shall just see into the heart of the

whole thing. (Barbara Milton, 65)

I think I've always believed that [there is some sort of implicit order within things] and I think I would call myself religious up to a point. (Creighton, *Interview*, 29)

神と人間、永遠と有限、完全な善と凝視される客体としての人間、こうした二項対立の哲学は、フェミニスト的な分析からは父権的な力の哲学であると解釈されるかもしれない。だが、Roseによれば、ドラブルはこうしたフェミニストの分析の圏外にこの小説を置いたと解釈されている (Rose, 122-123)。「何かを信じたい」というドラブルの思いは、Anthonyの信仰による精神的回復の結末に投影されているし、Anthonyの回復は次作のKateの、不確かなものに怯えずにそれを楽しむという決断と回復の伏線となっている。

結び

本稿の序でも述べたように、ドラブルは、IAにおいて新機軸を打ち出す意図で、深刻な経済不況を背景に不動産開発業の男 Anthony を生み出した。これまでの日常性を基盤としたドラブル小説とは異なった背景設定には作家の意図的な挑戦があった。

しかしながら、この作品では、ドラブルの試みは、半分は成功したが半分は失敗したと見るのが妥当であろう。社会状況と人物の精神的混迷を有機的に結合させ、心理のひだを時間の層として重ね書きする手法は特筆に値するが、終盤のプロットの急展開と唐突に見える神への帰依には納得がいかない読者も多いだろう。むしろ、次作 MD (*The Middle Ground*, 1980) においてこそ、ドラブルの挑戦は真に達成できたと評価されよう。IA は、MG にたどり着くための試行錯誤の序曲であり、ドラブルの試みの真価は次作をもって到達できたとと言える。

作品では心的表象としてのランドマークを媒介にして、過去と現在が呼び起こされ、羊皮紙の上の重ね書きのように、二つのものが合流した。この合流は他者の視点とも合流し、他者への理解を促進させ、内省の深まりと連続的な循環性を予期させた。Anthony は製菓工場の過去を連想することで、土地が持つ歴史の層を解読できる人であった。しかしながら、小説の後半部では、新旧2つのものは混じり合わず、直線的に並置され、連結の可能性は否定された。Anthony と Alison は、過去と現在を連結できないし、未来も把握できない。ところが、最終的に Anthony は、過去・現在・未来を思索する理性的活動も、自分で決断し行動する自由意志の活動も、そして不条理と思える運命の災禍もすべてが、神の摂理を認識してこそ、その真意が理解できると確信するようになる。

神への帰依は唐突で不可解な成り行きでもある。ドラブルは自由意志と運命の対立や調和について、他の小説でも絶えず言及してきたが、本作品では、自由意志と運命の共存は神の摂理を受諾することで達成される。運命の受諾は、Bokat が指摘するように、ドラブル小説では不可解な人生を理解するための道具であり、精神的混迷を解決させる容易な手段であったとも言える。運命論や信仰への帰結は、人物の魂を回復させるには手っ取り早いですが、同時に思考停止の感もぬぐえないからだ。その上、“Britain will recover, but not Alison Murray.” (IA, Part 3, 297) の一文で小説を結んだのは、Anthony を回復させる一方で、ドラブルがもう一つのメッセージを送っているからだろう。インタビューでドラブルは、“Life isn’t fair, life isn’t easy, and not everybody can be happy.” (Cooper-Clark, 20 ; Hardin, 289) と、複雑な人生への感慨を折にふれ述べている。その含みを、「Alison は回復しない」の一文に残したと言える¹⁵。そうしたドラブルの逡巡や迷いは読者に戸惑いを与えているが、作品に含蓄と奥行きを与えていることも確かである。

IA が MG の試作的な作品として、両作品を比較すると、やはり後者の小

説 *MG* に軍配が挙がるが、それでも、*IA* は、ドラブルが新しい試みを模索した中間地点と言える作品になっている。その意味で、次作のタイトルが *The Middle Ground* (中間地帯) と命名されたことは意味のある必然と言える。

註

- 1 ドラブルは日本講演およびインタビューで、*IA* を書くために Oliver Marriott の *The Property Boom* (1969) を読んだことや、Marriott から不動産開発業者を紹介してもらい、その人物と一緒にイギリス国内を旅して、その開発業者が建てたビルを見て回ったことについて話している (Suga, 89 ; Gussow, 41)。
- 2 ドラブルはインタビューで、*IA* を書いた理由として、“women’s writer” というレッテルをはがすため、そして「女性にちよっと飽きた」ため、という理由を挙げて、この作品が心機一転を図った作品であることをほのめかしている (Gussow, 41)。
- 3 Myer は、*IA* には文学作品からのアリュージョンが多く、過去のテキストのパリンプセストのようだと述べている (Myer, 119)。
- 4 ジェイン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) の *Pride and Prejudice* (1813) では、Elizabeth Bennet の叔父 Mr Gardiner (エリザベスの母の弟) はロンドンで商売 (“business,” “trade”) をしていたために社会的地位の低い親類として、Miss Bingley や Mr Darcy から蔑まれた。作品では、オースティンはこの叔父夫婦を非常に高く評価している (*Pride and Prejudice*, Chaps. 8, 33, 34, 35&56)。
- 5 トマス・ハーディ (Thomas Hardy, 1840-1928) の *Tess of the d’Urbervilles* (1891) の Angel Clare は国教会牧師の三男坊であったが、その彼は「ケンブリッジの大学教育は神の栄光のため (牧師になるため)」でなくても、「人間の栄光のため (教養を積むこと)」 (Chap. 18, 144) に重要であると父親に向かって抗弁する。
- 6 Sizemore は、ドラブルの男性人物はヒエラルキーの縦のイメージであるランドマークを使い、女性人物は横に広がるネットワークのイメージを使うと指摘している (Sizemore, 14&16)。

Anthony の転身に最も影響を与えた企業家 Len Wincobank は、シェフィールドに実在するアパート群「パーク・ヒル」(*IA*, Part 1, 52) やニューヨークやシカゴの高層ビル群 (Part 1, 55) など、壮麗な建築物を愛した。高層ビルは

Len の内面的なランドマークでもある。それは、貧しさから物質的な豊かさへの上昇志向を立体的に表象するものである。

- 7 拙著『フェミニズムとヒロインの変遷—ブロンテ、ハーディ、ドラブルを中心に』200-204
- 8 ドラブルの父方の祖父母は菓子工場を所有していた。ドラブルの姉で作家の A. S. Byatt (1936-) の短編小説 “Sugar” (*Sugar and Other Stories*, 1987) にはその工場が登場する (Myer, 123)。
- 9 Hansen は、フェミニスト批評の視点から、新旧、公私、共同体と個人などの対立関係が男女間の価値観の対立関係をなぞっているし、ドラブルは男女の想像力の使い方の相違をも明確化していると分析する (Hansen, 151-169)。それゆえに、二つの対立関係は統合せず、直線的となるのかもしれない。
- 10 ドラブル自身、我々の持つ自由選択の範囲は狭いとインタビューで発言している (Barbara Milton, 44)。

The Needle's Eye (1972) の Rose Vassiliou も運命を受諾した。ただし、*The Waterfall* の一人称と三人称の Jane が行ったように、Rose が「選択」と言う時、それは自分の意志で自由に選び取ったものでもあるし、同時に運命づけられて逃れようのない必然的なものでもあると認識して、自由意志と運命の共存を図っている (*The Needle's Eye*, 337)。
- 11 ドラブルは、*The Needle's Eye* について、「信仰なしに宗教的生活をおくる可能性を描いた作品」と銘打ったが、Rose は信仰によってではなく、運命を受諾することで利他的な生活を送ろうとした (“The Author Comments,” 35)。
- 12 Korenman は、Anthony の宗教的覚醒や作作的な結末について、ドラブルが人生の無意味さを読者に印象づけて小説を終わるのを回避したせいではないかと述べている (Korenman, 71)。
- 13 その他、Creighton は、小説の結末について、“deus ex machina” (*IA*, Part 2, 209; 劇・小説などの筋上の困難を解決するための不自然で無理な結末) であると述べている (Creighton, 99)。

また、Lambert は、ドラブルの強みは “lyric strength” にあると述べる。したがって、読者は起こりそうもない出来事をむしろ喜んで許容すると解釈している (Lambert, 31)。

追記すれば、Tim (売れない俳優) が出演する映画の筋書きは Anthony がたどる一連のスパイ活動の筋書きと類似しているのも、これは Anthony の不自然な筋書きのパラレルとなっている (Hansen 168-169)。しかも、サスペンス仕立ての筋書きを予告するかのようになり、Anthony はジョン・ル・カレ (John le Carré, 1931-2020) のスパイ小説を Clegg から借りているし、Jane からはソフォ

クレス (Sophocles, 496頃 BC-406頃 BC) の *Antigone* を借りている。

- 14 Leeming は、神への帰依について、“He recognizes that his interest in God may be due solely to his peculiar situation” (収容所という特別な状況に拘束されているせいかもしれないと彼はわかっている、*IA*, Part 3, 295) という語り手の説明の曖昧性を指摘している (Leeming, 65)。さらに、Amodio は、この作品の欠点として、過剰な単純性を挙げている (Amodio 197)。

その一方で Milton は *IA* の書評で、ポエティウスのパラレルとして、現代版ポエティウスとしての Anthony が個人の失敗とイギリスの衰退、運命の不条理と未来の希望などについて思索するこの作品を高く評価している (Edith Milton, 28-30)。

- 15 「Alison は回復しない」という一文に対してさまざまな解釈がある。

Rose は、フェミニストの視点から見れば、女性はポエティウスの哲学からも Anthony の信仰からも慰めを得ることはできない、それゆえに Alison は回復しないと解釈している (Rose, 121)。

Hansen によれば、Alison に「想像を超えた人生が待っている」のは、娘 Molly がいるから「想像もつかない」し、幸せにもなれないのである。しかし、その「想像」とは男性の世界観から連想される「間違った想像」であり、Alison はそうした男性の価値観とは違う立場で生きる女性であると解釈される。男性の価値観に照らせば、Alison は幸せになれないのである (Hansen, 167)。

Sadler は、「Alison は回復しない」という一文における Alison に対する扱いは独善的で間違っていると批判している (Sadler, 114)。

Works Cited

- Austen, Jane. *Pride and Prejudice*. 1813. Ed. with Intro. Tony Tanner. London: Penguin Books, 1972.
- Amodio, Bonnie Ann Solowitch. *The Novels of Margaret Drabble: Contradictory, Hallucinatory Lights*. Diss. Michigan University, 1980. Ann Arbor: UMI, 2001.
- Boethius. *The Consolation of Philosophy*. Trans, Intro & Notes. Richard Green. Indianapolis: The Bobbs-Merrill, 1962.
- Bokat, Nicole Suzanner. *The Novels of Margaret Drabble: “this Freudian family nexus.”* New York: Peter Lang, 1998.
- Byatt, A. S. “Sugar.” *Sugar and Other Stories*. London: Chatto & Windus, 1987. 215-249.
- Cooper-Clark, Diana. “Margaret Drabble: Cautious Feminist.” *Atlantic*

- Monthly*, 246, No.5 (Nov. 1980): 69-75. *Critical Essays on Margaret Drabble*. Ed. Ellen Cronan Rose. Boston: G. K. Hall & Co., 1985. 19-30.
- Creighton, Joanne V. "An Interview with Margaret Drabble." Living Author Series No.4. *Margaret Drabble: Golden Realms*. Ed. Dorey Schmidt. Edinburg: Pan American Univ, 1982. 18-31.
- , *Margaret Drabble*. London & New York: Methuen, 1985.
- Drabble, Margaret. *A Summer Bird-Cage*. 1963. London: Penguin Books, 1967.
- , *The Waterfall*. 1969. London: Penguin Books, 1971.
- , *The Needle's Eye*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1972.
- , *The Realms of Gold*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1975.
- , *The Ice Age*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1977.
- , *The Middle Ground*. London Weidenfeld and Nicolson. 1980.
- , "The Author Comments." In Monica Lauritzen Mannheimer, "The Search for Identity in Margaret Drabble's *The Needle's Eye*." *Dutch Quarterly Review of Anglo-American Letters* 5 (1975): 24-38.
- Gilligan, Carol. *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*. Cambridge: Harvard UP, 1982.
- Gussow, Mel. "Margaret Drabble: A Novel and an Interview." *New York Times Book Review* 9 Oct. (1977): 7 & 40-41.
- Hansen, Elaine Tuttle. "The Use of Imagination: Margaret Drabble's *The Ice Age*." *Critical Essays on Margaret Drabble*. Ed. Ellen Cronan Rose. Boston: G. K. Hall & Co., 1985. 151-169.
- Hardy, Thomas. *Tess of the d'Urbervilles*. 1891. Intro. P. N. Furbank. London: Macmillan, 1974. The New Wessex Edition.
- Korenman, Joan S. "The 'Liberation' of Margaret Drabble." *Critique: Studies in Modern Fiction*, Vol.XXI., No.3, 1980: 61-72.
- Lambert, Ellen Z. "Margaret Drabble and the Sense of Possibility." *University of Toronto Quarterly* 49, No.3 (Spring 1980): 228-251. *Critical Essay on Margaret Drabble*. Ed. Ellen Cronan Rose. Boston: G. K. Hall & Co., 1985. 31-52.
- Leeming, Glenda. *Margaret Drabble*. Horndon: Northcote House Publishers Ltd, 2006.
- Milton, Barbara. Interview. "Margaret Drabble: The Art of Fiction LXX." *Paris Review* No.74 (1978): 41-65.

- Milton, Edith. "The Ice Age by Margaret Drabble." Rev. of *The Ice Age*. *The Republic* Vol.177 (17), Oct. 1977: 28-30.
- Moran, Mary Hurley. *Margaret Drabble: Existing Within Structures*. Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois UP, 1983.
- Myer, Valerie Grosvenor. *Margaret Drabble: A Reader's Guide*. London: Vision Press, 1991.
- Rose, Ellen Cronan. *The Novels of Margaret Drabble: Equivocal Figures*. London: Macmillan, 1980.
- Sadler, Lynn Veach. *Margaret Drabble*. Boston: Twayne Publishers, 1986.
- Sizemore, Christine Wick. *A Female Vision of the City: London in the Novels of Five British Women*. Knoxville: Tennessee UP, 1989.
- Suga, Yukako. ed. with an intro. *The Tradition of Women's Fiction: Lectures in Japan by Margaret Drabble*. Tokyo: Oxford UP, 1982.
- 風間末起子著 第5章「エンパワーメントとヒロイン」の「3. 都会の中の女性—『中間地帯』(1980)の試み」192-215. 『フェミニズムとヒロインの変遷—ブロンテ、ハーディ、ドラブルを中心に』京都, 世界思想社, 2011.
- 『聖書—新共同訳』東京, 日本聖書協会, 2004.
- 渡辺義雄訳『アウグスティヌス、ポエティウス』世界古典文学全集 第26巻 東京, 筑摩書房, 1966.

Others

- Bailey, Paul. "Of Prophecy and Puppetry." Rev. of *The Ice Age*, by Margaret Drabble. *Saturday Review*. 7 Jan. 1978: 39-40.
- Forster, Margaret. "What Makes Margaret Drabble Run and Run." *Guardian Week-End* 28 Feb.1981: 9.
- Freedman, Adele. "No More Happy Ending?" Rev. of *The Ice Age*. *Canadian Forum* Vol.57. Dec-Jan. 1977-78: 40.
- Hannay, John. *The Intertextuality of Fate: A Study of Margaret Drabble*. A Literary Frontiers Edition, No.28. Columbia: Missouri UP, 1986.
- Kenyon, Olga. *Women Novelists Today: A Survey of English Writing in the Seventies and Eighties*. New York: St. Martin's Press, 1988.
- Moers, Ellen. *Literary Women*. 1963. Intro. Helen Taylor. London: The Women's Press, 1978.
- Parker, Gillian and Janet Todd. "Margaret Drabble Interviewed by Gillian Parker and Janet Todd." *Women Writers Talking*. Ed. Janet Todd.

- New York & London: Holmes & Meier, Publishers, 1983. 161-178.
- Preussner, Dee Johnston. "Talking with Margaret Drabble." *Modern Studies* Vol.25. 1979: 563-577.
- Stovel, Nora Foster. "The Aerial View of Modern Britain: The Airplane as a Vehicle for Idealism and Satire." *Ariel: A Review of International English Literature*. Vol.15, No.3. July 1984: 17-32.
- ドラブル, マーガレット『氷河時代』斎藤数衛訳, 東京, 早川書房, 1979.
- 風間末起子「コラージュ・シティとしてのロンドンと女性たち(1) —ドラブルの *The Middle Ground* (1980) 考」『同志社女子大学学術研究年報』第56巻, Dec. 2005 : 13-25.
- 風間末起子「コラージュ・シティとしてのロンドンと女性たち(2) —ドラブルの *The Middle Ground* (1980) 考」『同志社女子大学学術研究年報』第57巻, Dec. 2006 : 1-10.
- 依岡道子「ドラブルの『氷河時代』」『名古屋女子大学紀要』26, 1980 : 257-262.